

本物にふれる学びから育つ国際理解 —チリにおける実地体験を通して—

前在チリ日本国大使館付属サンチャゴ日本人学校 教諭
福岡県小郡市立三国小学校 教諭 是 永 早 紀

キーワード 在外教育施設、チリ、サンチャゴ、アタカマ、コマツ、タキイ、国際理解、キャリア教育

赴任校の概要（2025年3月7日現在）

在チリ日本国大使館付属サンチャゴ日本人学校

Colegio japonés Santiago de Chile

URL : <https://www.iejapones.cl/>

児童生徒数：小学部29人 中学部4人

1 はじめに

チリは南米の細長い国で、太平洋とアンデス山脈に挟まれ、砂漠から氷河まで壮大な自然が広がっている。首都サンティアゴ（通称：サンチャゴ）は、アンデス山脈のふもと、近代的な高層ビルが立ち並ぶ一方でスペイン植民地時代の歴史ある建物も残る、南米らしさと欧州風情が共存する都市である。

グローバル化が進む現代において、子どもたちが世界とつながりながら「自分ごと」として学ぶことの重要性が増している。日本人学校の教員として児童とともに参加した3つの実地体験を通して、本物にふれる学びが、国際理解・キャリア教育にどのような影響を与えるかを整理し、今後の教育実践への応用の可能性を提案したい。

2 研修・見学の実際

(1) 宇宙に一番近い教室 —ALMA望遠鏡での研修体験—

チリの北部に位置し、首都サンティアゴから約1,600km、飛行機とバスを乗り継ぎ約3時間かけてたどり着く、サン・ペドロ・デ・アタカマ（以下、アタカマ砂漠）は、標高約2,400mにあり、乾燥した気候と澄んだ空気が特徴である。その中の都市カラマは、鉱業の中心地として知られている。カラマの近郊には、世界最大級の露天掘り銅鉱山であるチュキカマタ鉱山があり、長年チリ経済を支えてきた。

2023年8月、アタカマ砂漠にある国立天文台ALMA（アルマ）を職員研修で訪問した。ALMAでは、世界中から科学者が集まり、宇宙の起源や星の誕生を探る最先端の研究を行っている。最大の見どころである66基の望遠鏡群（以下、アルマ望遠鏡）は、標高5,000mにある。標高5,000mまで登るために、事前に医師の診察を受ける必要があり、体調管理を万全にしなければならない。酸素ボンベを付けるため、子ども達を連れていくことは難しい。血圧が高く見学できない参加者もいた中、幸い見学が叶った。実際の標高5,000mは遮るものが多く、これまで感じたことのない強風で前に進むのもやっとであり、すぐ近くにいる人の会話もままならなかった。空気は薄く、何とか酸素ボンベを付けて呼吸するも、高山病のような頭痛を感じる瞬間もあった。実際にアルマ望遠鏡を見学し、乾燥した大地と澄みきった空の下、巨大なパラボラアンテナが並ぶ光景は圧巻で、「科学とは、未知を知ろうとする人間の営み」そのものだと感じた。ALMAでの学びは、

教科書を超えた生きた学びの重要性、そして国際協力や最先端科学の現場から教育的価値を得ることができた貴重な体験であった。

アタカマ砂漠に滞在中、新月に星空ツアーに参加し、日本では見たことのない、想像を超える星々と空一面の天の川を見て涙が出るほど感動した。世界一の星空が見える場所の一つであるといつても過言ではない。

【写真1】

9月には、日本人学校に国立天文台の講師を迎えて、天文教室を実施した。「天の川と銀河系」について、写真や動画を交えながら詳しい説明があった。国立天文台の先生方は、休日に剣道の課外活動の講師をされているなど、あらゆる場面で活躍されている。

子どもたちは「アタカマに行ったことがあるけれど、星の勉強をしてもう1度行ってみたくなった」「アタカマ砂漠にまだ行ったことがないので、行って星空を見てみたい」などの感想を持っていた。天文教室は毎年実施しており、子どもたちが宇宙や銀河系に興味を持つ良い機会となっている。

(2) 命のはじまりにふれる学び —タキイ種苗での収穫・研究体験—

2024年1月、タキイ種苗のご厚意で、全校の児童生徒が農場を訪問し、野菜の収穫体験をした。児童の保護者も勤務しており、子どもたちにとって親しみのある企業である。はじめに、野菜の種が仕分けされる倉庫を見学した。【写真2】

次に、種の研究室にも入らせていただき、種がどのように品種改良され、世界中に届けられているのかを学ぶことができた。また、実際に種を検証している畠では野菜の育て方を見学できた。

最後に、野菜の収穫の仕方を教わり、買い物袋がいっぱいになるほどの野菜をいただいた。スイカ、メロン、トマト、タマネギ、カボチャ、キュウリ、ナスを収穫した。土に触れ、実った野菜を自分の手で収穫するという体験は、「食」や「命のつながり」を子どもたちが五感で実感する貴重な学びとなった。また、普段見ることのない研究の現場にふれたことで、農業や科学、そして日本の技術が海外で活躍していることへの理解も深まった。

サンチャゴ日本人学校では、タキイ種苗より花や野菜の苗をいただき、学校農園で育てている。2年間担任をした2年生では、秋(4月～6月)にパンジーやビオラ、冬(7月～9月)にキャベツやブロッコリー、夏(1月～3月)にトマト、ピーマンを育てた。チリの季節は日本とは反対で、乾燥した気候なので、水やりが欠かせない。マルチの間に水の出る管を通したり、スプリンクラーを時間で設定したりしながら栽培を行っていた。また、野鳥も多く、作物が狙われる所以簡易のビニールハウスを作ったり、反射板を自作したりして鳥から作物を守るための対策をしていた。子どもたちは、育てる野菜に名前を付け、朝登校すると一番に畠に様子を見に行ったり、水やりをしたりして喜んでお世話をした。



【写真1】アタカマ砂漠の星空



【写真2】タキイ種苗にて 種の倉庫を見学中

(3) 社会とつながる学び —コマツ工場見学—

2024年7月、全校児童生徒でコマツ (Komatsu Chile) を訪問した。子どもたちは、初めて目にする巨大な重機にとても驚いていた。タキイ種苗同様、児童の保護者が勤務している。大型トラクターに乗ったり、巨大なダンプがエンジンを始動させ荷台部分を傾ける姿を見たりすることができた。

【写真3】

部品製造の工場を間近で見ることで、教科書だけではわからない重機産業の現場を体感することができた。また、コマツの重機は、主にチリの鉱山開発に使われており、日本の技術が国際社会でどのように活躍しているかを知る良い機会となった。この体験を通して、子どもたちは「仕事」や「産業」が自分たちの生活とつながっていることに気づき、学ぶ意欲を高めていた。

社会科の学習においても「身近な人の仕事を知る」「日本と世界のつながりを考える」といった探究的な視点を育む貴重な機会となった。「どうしてコマツで働くようになったのか」というお話を聞かせていただき、子どもたちの今後の生き方のヒントになった。



【写真3】コマツ工場にて
ショベルと一緒にクラス写真

3 3つの体験に共通する教育的価値

2年間にわたるチリでの教育活動は「本物にふれる学び」の力強さと、その学びが私自身を含め、子どもたちの心にどのように働きかけるかを学ぶ大変良い機会であった。ALMA天文台や天文教室を通して宇宙へのまなざしを育み、タキイ種苗の農場で命の根源にふれ、巨大重機の躍動するコマツ工場で社会と産業のつながりを実感するこれらの体験は、単なる見学や行事だけでなく、子どもたちの五感を刺激し、自ら問いを立てて学ぶ「探究心」の土台となった。そしてそれは、グローバル化する社会に生きる力、自分と世界との接点を見つけ出す力となり、児童生徒の心に確かな足跡を残したように感じている。また、日本人学校という在外教育施設ならではの特性を生かし、現地企業や地域社会との連携を深めることで、教育の可能性が大きく広がることも実感した。実地体験を通じて育まれる国際理解、職業観、そして自然科学への興味は、いずれも学校の枠を越えた実践だからこそ生まれるものであり、教育が社会とつながることの大切さをあらためて認識した。

これからの時代を担う子どもたちには、知識だけでなく、未知と出会い、他者と協働しながら問い合わせ続ける力が求められる。その力を育むためにも、本物へと踏み出す体験的な学びを、今後の教育活動でも積極的に取り入れていきたい。チリで得た学びが日本や他の地域でも活かされ、子どもたちが広い世界へ自信を持って羽ばたいといけるよう、これからも教育現場で模索と実践を重ねていきたい。